

眉をあぐれば

秋田県立雄物川高等学校
校長室だより 第5号
平成29年10月10日(火)
執筆 信田 正之

まみぶくろ

コモンホールの一角に、ニホンアナグマの剥製が展示されています。これを寄贈したのは、本校一期生の土田信義さんという方だそうですが、説明書きには「猫（マミ）とはアナグマのことで、本校の所在地である猫袋にはかつてアナグマがたくさんいた」というようなことが書かれています。私もアナグマは知っていますが、「ムジナ」と呼ぶことはあっても、「マミ」という呼び名は初めて耳にします。

そこで気になってネットで調べてみると、「マミとはタヌキまたはアナグマのことで、人をたぶらかす魔魅（まみ）という妖怪の名前が由来」という記述を見つけました。そう言えば、昔から「タヌキは人に化ける」と言いますし、子どものころに「白装束の女性に化けたムジナ（アナグマ）を見たことがある」という話を祖母から聞いたことがあります。また、別のサイトでは、「地方によってタヌキやアナグマのことをムジナと呼ぶ」という記述もあります。要するに、「タヌキとアナグマは外見や習性がよく似ているため混同されやすく、それらをまとめてマミまたはムジナと呼んだ」ということのようにです。

そうすると、この地に生息していたマミはタヌキか、アナグマか、気になるのが私の悪い癖です。コモンホールにある剥製には、「マミはアナグマである」と書かれています。そのように断定できる理由は何でしょうか。そこでもう一度、地名の「猫袋」を考えてみたいと思います。「猫袋」の「猫」の意味は分かりましたが、「袋」は何を指すのでしょうか。何人かの同窓生の方々に尋ねてみたところ、「袋とは巣穴のことであろう」という話でした。さて、アナグマは名称に「アナ」があるとおり、自ら巣穴を掘ってその中で生活します。一方のタヌキは、アナグマやキツネがつくった巣穴を間借りすることはあっても、自分で巣穴を掘ることはめったにしないそうです。故に、「猫袋と呼ぶくらいこの地にはマミの巣穴が多かったのだから、その動物はアナグマであろう」というのが最終的な結論です。

「猫袋」という地名一つで長々と書いてしまいましたが、地名というのはその土地の歴史や特徴を知る大きな手がかりになります。例えば、雄物川地区にある「沼館」や「今宿」という地名から、昔はここに大きな館や宿場があったことが想像できます。ぜひ皆さんも、自分の住む地域の地名に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。思いもよらぬ歴史ロマンを感じることができるかもしれません。

もう一つ「猫袋」にまつわる話を。6月ごろ、事務室にある女性の方から、「私は本校の二期生だが、私たちが作成した文芸部誌は今も学校に残っているだろうか」という旨の電話がありました。もちろんすぐに捜しましたが、残念ながらそのような書籍は見つけれませんでした。それからしばらくして、私が校長室の書棚を整理しようと奥を覗いていたところ、本校が開校して間もない時代の生徒会誌を発見しました。名前は「まみぶくろ」。その第9号をめくっていくと、何とその女性の書いた短編小説が掲載されているではありませんか。昔は文芸部が生徒会誌を作成していたんですね。捜しても見つからないはずで。早速、その方に連絡して学校に来ていただきました。コピーを渡すと顔をほころばせ、「これをみんなに見せます」と言って満足そうに帰って行かれました。ちなみに、本校の生徒会誌のタイトルは、1～17号が「まみぶくろ」、18～26号が「沼原」、そして27号以降は「おもの川」となっています。学校の変遷とともに生徒会誌のタイトルも変わってきたのが分かります。また一つ、本校の歴史を感じる出来事でした。